第２０８号
平成１９年１月
© 2007
E-mail :
shimz@mb.infoweb.ne.jp

SCだより

編集発行人
清水吉男
（株）システムクリエイツ
横浜市緑区中山町 869-9
TEL/FAX 045-933-0379

Café りふれ　73回め

MENU
特製ブレンド 380
レモンティー 350
日替りケーキ 300
ぷろせす 無料
アルコールは置いていません

「最後の手段、ですか？」
どんな方法だろうかという興味と不安が入り交じった顔をしている。
『あなたが判断して、今回の３つの機能は本当に必要かね？』
「そうですね。追加機能の要求や理由を把握していく中で要求の出所が掴めたのですが、競争上で不可欠と思われる機能は１つだけです」
『あとの２つは？』
「１つは必要性をほとんど感じません。特定の顧客から出ているようですが、営業担当が遊ばれているのではないかという気がします」
『顧客の担当者も“言ってみただけ”の要求ではないかと言うのかね？』
「そうです。営業の人たちとしては、お客様の言うことを実現するのが設計の仕事だと思っている人がほとんどですからね」

～ ∞ ～

『オーケー、もう１つの追加要求は？』
「残りの１つは、４つの環境設定データを整合性を保ちながら連携して保存する機能です。たしかにあると便利な機能です。もともとこの４つの設定データは個別に保存と再現する機能を持っていて、実際に計測する際にそれぞれ４つのテーマ別に保存ファイル一覧から選んで再現してから計測作業に入っていたのですが、組み合わせを間違えると正しい計測ができません。そこで、１つの保存ファイルを選択すれば、残りの３つはこの保存ファイルと一緒に保存したものを連動して再現するという機能です」
『なるほど、要求されそうな機能だね。むしろ、このような機能の必要性に最初に気づかなかったことに問題がありそうだね』
「はい。ユーザーの立場で機能を見ていなかったということでしょうか。“ユーザビリティ”の視点が必要だったと思っています」
『ところでこの追加要求の実現性に障害があるのかね？』
「はい。連携して再現した場合でも、個々の環境設定データはあとで個別に変更することもできますので、その状態で保存操作が行われたときに新しい連携のセットとして保存するかといったことを確認しなければなりません。もし連携が外れたデータができてしまうと、次回に再現する際に、一部の設定データの再現ができていないことを知らせる必要があります」
『これまでの製品では連携はしていなかったのだろう？』
「はい、操作する人が個別に関係するファイルを読み込んでいました。おそらくファイル名の付け方などを工夫して保存していたものと思われます。連携機能を提供するとそのような工夫が消えてしまう恐れがあり、再現時に連携が切れている保存ファイルを指定した場合に、他のファイルも個別に読み込む必要を指示されても対応できなくなるのではと思っています」
『つまりそのような機能を追加すると操作ミスが増える危険もあるわけだ』
「そう思っています。今回この機能を追加した場合、完成後にいろいろとややこしい仕様変更が発生するのではないかということと、他にも同じような保存と再生のパターンが３つあり、今回の機能追加が“やぶへび”にならないかという危惧も抱いています」
『うーん、それでもこの機能の必要性は感じるね。ただ、中途半端な仕様にすると却って混乱するし、既存機能との面倒な調整が必要になってくる。ときどきこういうのがあるんだよね。機能的に無理があるケースでしばしば目にするパターンだが、今回は機能的に無理なケースということではなさそうだ』
と言われて、
「やっぱり、必要な機能ですかね」
『問題は、あなたの中で変更範囲の整理がついていないことだ。考える手順や前提を間違えているときにこうした状態に陥ることが多いのだが、何か思い当たる所はないかね？』
と言われて考え込んだ。しばらく様子を見ていたが、気づかないようだ。
『対応の範囲を限定していないか？』
「それって、今回の追加要求の中で展開される仕様の範囲で対応しようとしていないかということですか？」
『そう。基本的には変更要求だから、既存機能の仕様にも影響を与える』と言われて、
「わかりました。すでに用意されている設定データの保存機能をそのままにして、今回の追加機能にどう対応するかということばかり考えていたようです。最初からこの機能が要求されていれば、それらの保存の仕様も現状とは違ったものになっていたはずですね」
『“追加”ということに囚われたね』
「もういちど、“理由”を見直しながら関係する機能をまとめて整理してみます」
と優等生のような返事が返ってきたが、簡単な話ではないことに気づいていないようなので、
『ところで、関係する機能のほとんどは既にソースコードになっているよね』
と言われて簡単ではないことに気がついた。
「今回は新規開発なので、そこで書かれている要求仕様書は新規開発用の形式で進めています。今回追加要求に対して製作中の既存機能の仕様が大きく変わったり、いくつもの仕様が変更されることが予想されます。これまでもこれに似たことに何度も遭遇していますが、いつも作業は混乱してバグも多く発生させています」

～ ∞ ～

「あのう」しばらく考えた後で顔を上げた。
『何かね？』
「今回は新規開発のプロジェクトですが、この機能追加にXDDPという方法は使えますか？」
どうやら問題の解決方法に気付いたようだ。
『あぁ、使えるよ。XDDPは何も派生開発にしか通用しないわけではない。新規開発でも既に大部分はソースコードまで書いている状態で、既存機能の仕様にいろいろと変更が生じるような状況には、XDDPのプロセスを適用する方法がある』
という返事にほっとした表情を見せた。
「だから”XDDPによる発生開発”という表現を使ったのですね。雑誌で読んだときは回りくどい表現だなと思っていました」
『そうか。“XDDP＝派生開発”という捉え方をされてしまったかもしれないね。派生開発は“XDDP”のプロセスを使うが、“XDDP”のプロセスは他の場面にも使える。発表が雑誌だったので、紙数の制約があってそこまで詳しくは説明できなかったね』
「機能追加なので、それぞれの機能を追加機能要求仕様書でまとめ、それに対して現在実装されているベースに対する変更方法を変更要求仕様書でまとめるということですね。変更に関する見積りも、追加の要求仕様と変更要求仕様に沿ってやればいいですね」
『基本的にはそれで良いが、仮のベースとなるソースコードの正しさは、まだテストで確認されていないということを忘れないように』
「はい。バグなどによってこの先も変更される可能性がありますよね。でも機能追加に関するソースコードの変更は、現状の単体テストが終わった後でまとめてやります。追加機能に関連して変更を予定している関数はTMや変更設計書でわかっていますので、該当する関数がバグなどで変更されたときに、影響を受けるかどうかを判断することは難しくないと思います」
『その方法で、必要性が高い機能はそのまま実現するものとして最後まで対応すればよいが、必要性が低い機能はどうする？』
「変更要求仕様か、せいぜいTMのところで止めておけば良いかなと思っています。そこまで来ていれば、あとどれくらいの工数があれば出来るか見えるでしょうから」
といって落ち着いた表情に変わった。

～ ∞ ～

カップに残ったコーヒーを啜って、
「マスターの言われた“最後の手段”というのが見えてきました」
『そうかね』
「今回は、２つの機能追加は期限内に実現する方向で作業を進めますが、１つの優先順位は私の判断で落とそうと思います。とりあえず追加機能の要求仕様だけをまとめておきますが、それ以降の作業は他の作業の進捗状況を見ながら進めることにします。もちろん、この方針は私の腹に収めたままにしておきます」
『でも、３つの機能追加を要求されているんだよね』と意地悪してみた。
「そうですが、工数的には無理なことは明らかですから、中途半端なことをやって混乱するよりも、必要性の高い２つは確実に期限内に実現させ、あとの１つは必要性に乏しいことや工数的に無理だと主張することにします。どうしても実現して欲しいということであれば、必要な工数の確保を条件にします。他の２つの機能追加が期限内に実現することに目処がついていれば、説得もしやすくなると思いますので、黙ってそこまで進めます」とって会釈した。
『マネジャーの方も、必要性に乏しい機能のためにリスクを犯さない可能性もあるしね』
「現場を預かっているのは私ですからね。モチベーションを落とすわけにはいきません」■

組織の中で合理的判断がされない状況では、正攻法で攻めるよりは、ＰＬ自身が腹を決めて現実的な判断に基づいて対応すべき場面もある。

暁の鐘 191

世界のことを知らされない国

今、「世界」では何が起きているのか、何が起きようとしているのか。日本のテレビや新聞などのマスメディアは、そのことをほとんど伝えていない。ニュース番組も身近な所で起きている事故や事件、ゴシップが中心だし、スポーツや芸能ニュースなどの娯楽番組がほとんどである。確かに「娯楽」も必要だが、聴視者の感覚もマヒしてくるから、番組の内容も過激になったり、揚げ句は捏造に足を踏み入れてしまう。

？・？

全体に、ニュースに割り当てられている放送時間やスペースも少ないし、その中で僅かに流される世界のニュースも、大部分は他の通信社から配信されたものを流しているだけで、日本のメディアの記者が現地で時間をかけて集めたものはほとんどない。ニュースの時間に合わせて、ちょっと街に出て情報を収集してくる程度である。これではそこで起きていることの背景まで知ることはできない。インターネットを駆使すれば世界のニュースやそれに関連した詳しい情報を入手することができるが、それでも日本語では限られた情報しか手に入らない。

？・？

イスラエルからイランなどの中東で何が起きているのか。エチオピアとソマリアの戦争で放送されたのは首都が攻撃されたという「事実」だけであって、その背後にあるアメリカの目的などは報道されただろうか。ロシアで何が起き、トルクメニスタンで何が起き、中国で何が起き、中米で何が起き、トルコで何が起きているのか。これらの地域で起きていることを繋いでみたとき、そこに二〇世紀とは違った動きを感じることができる。何かが大きく変わっている。

？・？

「ＯＬＰＣ」というプロジェクトがある。ＭＩＴ（マサチューセッツ工科大学）が主催するもので、一〇〇ドルの価格で「ノートパソコンを発展途上国の子供たちに配給しよう」という壮大なプロジェクトで、年間生産は一億台を想定している。当初はこのプロジェクトに疑問の声もあったが、実際に二〇〇七年から供給が始まる。当初の価格は一五〇ドルぐらいになりそうだが、一年も経てば一〇〇ドルを割り込む可能性もある。もちろん、子供たちから一〇〇ドルを徴収するわけではない。それぞれの国の教育機関やボランティア団体が買い取って、子供たちに配るのである。そのための寄付も集まっている。それらの国における教科書やノートなどが不足する問題は、これで一気に解消する。「ＩＴ技術」が格差を埋めるのである。知識に飢えた子供たちの行動は、今の日本の教育関係者には想像できないだろう。

OLPC=One Laptop per Childの略

このニュースを日本のメディアは報道してない。日本には関係ないと思っているのだろうが、一五～二〇年後に「これがＯＬＰＣの効果だったのか」といやでも気づかされることになる。

？・？

昨年一二月一九日のタイの株式市場で起きた一五％もの大暴落を報じたニュースもほとんどない。ましてや一〇年前に同じタイで起きた株式市場の暴落との違いを報じたものもテレビで見た記憶がない。一九九七年の「アジアの通貨危機」はこのタイの株式市場での暴落が引き金となって、韓国をはじめとしてアジアの経済が大混乱した。あの時は回復に数年の時間を要した。だが今回の大暴落は一日で回復している。この背景を伝える番組を見たことがない。日本経済にはほとんど影響がなかったからだろうか。

？・？

この一〇年間で、タイなどのアジアの国々の経済はほとんど黒字状態になっているという。外国に売れるものを作ることができているのだ。かつてのように単なる部品基地ではなくなっている。それがタイの一五％もの株式暴落を一日で回復させた背景である。この出来事は、日本の経済や企業だけでなく、日本の労働者にとっても最大級の出来事である。五～一〇年後には誰もが自分のこととして直面することになるだろう。

その間に何も「準備」しなければ、多くの人は時代の大波を被ることになる。そしてその瞬間から「ワーキングプア」となりかねないのである。それほどの大事なニュースをどの放送局（地上波）も流さない。

？・？

メディアの中にいる賢明な人たちに、このことが見えないはずはない。だとすると、見えているのに知らせないということになる。何も知らされない日本の国民は、ある日突然に身をもって「事実」を知ることになる。

たしかに、いちいち国民に知らせなくても、政策の中で適切に対応してくれればそれでも構わない。だが、日本の教育界は、一〇年後に主役の交代を迫られないための対応策を何も講じていない。学生数が減少する中でどうやって学校を経営をするかということに頭が一杯になっているように見える。個々の大学が主体となって、世界の潮流の変化に対応できる人材をどうやって育てるかというところに踏み出していない。時代を見て踏み出す度胸が無いのか、そのことについての見識がないのか、それともその役を全うする能力がないのか。日本の国民は何も知らない間に、世界はどんどん変わっているのである。■

今月の一言

「総理になると、三つのものが見えなくなる。第一に金。第二に人。第三に国民の顔。この三つめがわからなくなったときに総理大臣はのたれ死にする」

（元総理大臣、岡田啓介の言葉。「一八史略の人物学」（ＰＨＰ文庫）より引用）

「金」の問題は、総理になる前から見えなくなるようだ。代議士の事務所経費に領収証を義務化しようとする動きに対して、「膨大な事務作業が発生する」といって抵抗している代議士は、すでにマヒ症状を呈しているのだろう。

第二の「人」というのは、「取り巻き」に何重にも囲まれて、真実が見えなくなることをいっている。取り巻き連中は、自分たちの立場を危うくするような情報は遮断して、総理の耳に心地よいことしか伝えない。電子メールによる対話も、総理が直接操作しないかぎり同じことが起きてしまう。そのような状況の中で発する言葉は、現実から遊離し、記者からの質問にも意味不明の受け答えになってしまう。

その結果、「国民の顔」が見えなくなる。国民から期待されて総理大臣になったと思っていたのに、久し振りに街にでると、冷ややかな目が自分の方に向けられている。そうして総理大臣の椅子から引きずり降ろされるのである。もっとも、一代前の総理はそうなる前に自分から椅子を降りたが。

企業のトップも然りである。現場に足を運んで従業員と直接話しをすることもなく、見晴らしのよい本社の社長室に居て、取り巻きに囲まれていたのでは、本当の情報は上がってこない。どのような問題が生じているのかも分からなければ、どのように対応されているのかも見えない。

トップに「問題」が上がってきたときは、取り巻きの手に負えなくなったときであり、その時はマスコミの前に醜態を晒すことになる。